

# 安藤昌益研究の四十数年：回顧と展望

## ——三国志の時代を終えて群像時代の展開へ——

### 東條榮喜（科学史・安藤昌益研究）

この小文は、1960年代末期から今日まで、マルクス・エンゲルスと共に安藤昌益の思想を人生の指針として生きてきた者の追想と展望の記録である。併せて過去半世紀の安藤昌益研究界の推移を、私見に基づいて概括した。

#### 1) 独学収集期から寺小屋時代——原典研究の開始...

安藤昌益という人物に関心を持ち出したのは1960年代の半ばで、多くの人々と同様に岩波新書「忘れられた思想家」上下二冊を読んだ頃だった。一方でマルクス・エンゲルスの古典と取り組みながらも、日本の歴史における民衆的思想も併せて把握することが必要ではないか、そうしないと左翼改革派だと云っても所詮、明治以来の翻訳文化の延長上ではか歴史と社会を見るだけにならないか、というような観念を持っていたからであった。ノーマンの著作のあと、岩波文庫「統道真伝」上下二巻を読むようになったが、当初は昌益の、総ての歴史的思想家へのあまりにも激しい批判に反発を覚えながらも、万民平等・万民直耕の主張に引かれていくといった矛盾した心理状況がしばらく続いた。そして昌益関連の資料を集めるのが習性となった。

その後1968年から全国的な大学・学園闘争が始まると、そのさなかで安永寿延氏の「日本のコミュニケーションの原理——安藤昌益の社会思想」という論考が雑誌「思想」の同年11月号に載り、物情騒然とした雰囲気の中でむさぼるように読んだものだった。この論考は前年までに別の所に出す予定で出来上がっていたが、都合で「思想」誌に載る事となったという。それが結果的に大学闘争の雰囲気にマッチして、多くの読者を得たため、月刊雑誌であるにも拘わらず増刷発行されたと、後日安永教授から直接伺ったことがある。

そして1970年代に入り、私は寺尾五郎氏の“革命史観に基づく時代区分論”に関心を持ち出し、ご自宅を訪ねたのが契機となり、高田馬場で開講された『寺小屋教室』の安藤昌益研究講座（寺尾氏が講師）に第一期生として参加する事となった。ここで初めて、昌益の原典（この時は稿本『自然真営道』の第二十五巻から「問答語論」を選択）と取り組む事になった。昌益思想の読者の側から研究の側に移行し始めたということになるのか。理科系の道を歩んで来たため、高校教科以来久しく離れていた漢文読解を十数年ぶりに始めるようになり、読み下し文・語釈注解・現代語訳を三点セットで作成する作業を他の参加者と共に、半ば楽しみ半ば苦しみながら進める事が出来た。その共同作品が後に「季刊昌益研究」13号として刊行された。中心になって取り纏めたのは当時の事務局長＝相田博氏で、おかげで2年間ほど和気藹々の楽しい一時を過ごすことが出来た。思うに、この頃か

ら寺尾氏はこの昌益講座に集まった若者と共に安藤昌益全集を刊行する計画構想を持っていたようである。

しかし私は諸般の事情で中途から同講座を離れ、以後今日まで独立した昌益思想研究者として歩んできた。私の本職は素粒子原子核研究の加速器科学技術者であるが、昌益思想の研究に関しては公職と無関係の民間研究者であり、一週間の間に昌益思想の研究時間を作るのに苦労した。結局、殆どの場合には土曜日の夜中が唯一の落ち着いて取り組める時間帯であった。後に埼玉県内で『土曜考古学』という研究雑誌が発行されていることを知って、他分野にも同行の士がいるものだと感じ入るところがあった。

## 2) 1970年代中期からの四半世紀——“三国志”時代とその終焉

個人的な事から離れて、この頃の昌益思想研究界を概観すると、1974年には八戸図書館の西村嘉氏が地元の研究者を中心に編書『安藤昌益』（伊吉書院）を刊行、1976年には寺尾五郎著『先駆安藤昌益』（徳間書店）を、安永寿延著『安藤昌益』（平凡社）が相次いで刊行された。秋田県内では民族芸術研究所（田沢湖町・わらび座内）の発行する紀要二号『東北民衆の闘いと文化』（1975）、同三号『続東北民衆の闘いと文化』（1977）で石垣忠吉、三宅正彦氏の昌益論考が見られるようになった。石垣忠吉氏は1974年に昌益を顕彰した「石碑銘」や「掠織手記」などの史料を発見し、温泉寺の境内内に昌益の墓も発見し、初めて“昌益が実在人物だった”事を明らかにした。三宅氏は愛知教育大学で昌益思想の研究を進める一方、大館に出かけて昌益の地域的基盤の解明に取り組んでいた。

この頃から、昌益研究界は寺尾・安永・三宅の三氏に象徴される“三国志”的な様相を呈してきた。これは通俗的な表現で必ずしも的確とは言えないが、三氏の研究姿勢の明確な違いという事も加わっての印象でもある。マルクス主義的な立場の人々は寺尾氏による昌益研究に関心と支持を寄せ、エコロジーの立場から昌益思想にアクセスする人々は安永氏の所論に関心を寄せ、地域主義を掲げる三宅正彦氏は自らの大学でそうした観点での昌益研究を指導した。1980年代に入ると安藤昌益全集の刊行が三宅氏その他による校倉書房版と寺尾五郎氏の監修による農文協版の双方で始まったが、結局後者のみが1987年に完結し、前者は二巻を刊行しただけで中絶となった。農文協版の全集の成立で、一般の昌益研究者は昌益の全著作(当時における)を容易に閲覧できるようになったことは画期的だと思う。昌益の研究史はこの全集の刊行によって大衆的基盤が整い、更に国際的にも研究が促進される素地を作ったと言えよう。

1992年には安藤昌益研究の日中共同シンポジウムが数十人規模で中国・山東大学で開催され、私も報告者の一人として昌益と王船山の自然論に関して発表することが出来た。この頃、国内では昌益の新史料と称して贋作ものが徘徊し、一部の昌益研究者がそれにまんまと嵌められる、という事件が起きた。代表的な職業研究者であった安永教授は最後まで当の「史料」を本物だと主張し、英文・和文の新著でもその立場をとり、訂正せずに他界したので、今でも残念に思っている。私は1996年に初めて昌益思想研究の専著『安藤昌

益の「自然正世論」』を出すことが出来たが、その中でもこの件に触れておいた。この年には寺尾五郎氏の『安藤昌益の自然哲学と医学』『安藤昌益の社会思想』、いいたもも氏の『猪・鉄砲・安藤昌益』、萱沼紀子氏の『安藤昌益の学問と信仰』などの著書も出て昌益本ラッシュとなった。昌益研究の分野では大変珍しい偶然事だと思っている。

安永氏は1997年に、寺尾氏は1999年に、そしてたしか2003年だったと思うが三宅氏も他界されたので“三国志”の時代は終わった。現在、私見では寺尾氏の潮流は「安藤昌益の会」の関係者に引き継がれ、昌益思想の普及と昌益関連新史料の発掘に大きな寄与が為された。安永氏の潮流は八戸の研究者に受け継がれ、地域興しの運動と融合して盛況を呈している。三宅氏の潮流は若尾政希氏など一部の大学関係者に見られるが、昌益に差別思想や家父長傾向があるなどと偏った有害な主張をまき散らし、民間の非職業研究者の業績を無視する悪態を晒している。本来あるべき公正な研究姿勢に欠けるどころ大である。

この時期の大学での職業的昌益研究者の動態から、私は共通した特徴を見出し、それを「前進・後退の傾向性」と呼んでいる。簡単に云うと、大学の職業研究者は院生・助教・准教授時代＝前半期には昌益研究に関してそれなりに積極的創造的な成果を出す、後半期＝教授になり管理者層になるにつれて昌益研究から後退し、昌益思想自体からも離れていく傾向がある、という意味である。当人たちを誹謗するつもりはないが、これでは結果的に立身出世のために昌益と取り組み、目標を達成したらおさらばという“只野教授”にならないだろうか——狩野亨吉氏の立派な精神を改めて思い起こしたい。

### 3) 21世紀初期の現在——英雄無き群像の時代、新たな三潮流化

“三国志”時代の終焉と共に、21世紀に入ってから現在までの昌益思想研究界は“英雄”のいない“群像”研究者の時代になった感がある。『良中子神医天真』（内藤くすり博物館本および早稲田大学本、内容は異なる）、『良中先生自然真営道方』のような重要な昌益医学稿本や昌益哲学・医学の継承系譜に関わる『静谿謾筆』『静谿漫筆』その他の重要稿本は皆、民間の非職業研究者によって発掘され解説された。これが現在＝21世紀初期の実状であり、職業研究者の寄与は著しく低下したと云えよう。

それと共に、多くの昌益研究者の姿勢・学風が新たに三つの傾向に分かれ、再編されつつあるように思える。これを便宜上、小乗型・大乘型・便乗型と名付けることにしたい。小乗型の研究者とは特定の狭い範囲での細事には深入りするが、大局的観点の欠けた専門職人的な研究者で、一般人への昌益思想の普及活動には関心が薄く、文章表現も簡潔明瞭さを欠いた論考が多く、大衆性の無さを特徴とする。大乘型は多くの人に対して、昌益思想の理解されやすさを常に意図した論述を心がけ、専門性と普及性の両面を重視する姿勢である。自身を専門家としてばかりで無く、科学コミュニケーターのように専門家と一般人の橋渡しの重要性を理解している研究者と言えよう。便乗型は食いちぎり型と言ってもよく、時代思潮に合わせてテーマ化した昌益研究スタイルで、環境思想論や公共哲学の興隆に合わせて昌益思想の当該部分を掘り起こそうという、昨今の研究状況に多く見られる。

時代の支配的需要の方に昌益研究を従属させる傾向が強く、内在的理解は稀薄になりがちである。

昌益研究の多くの群像たちは、これら三極において離合集散を始めたように見受けられる。但し、こうした区分けで特定の人々にレッテルを貼る、と言うような下品な意図で提起したのでは無い事を断っておく。だが昨今の様々な昌益思想研究の動態を接していると、各研究者にこうした志向の違いを痛感せざるを得ないのである。以上は、主に昌益思想研究を中心にした感想だが、これとは別に地域史地域興しの立場から昌益関連の伝記的研究に重点を置く人々もおられる事を一言、付しておく。

私は今世紀に入って本職を定年退職できたので、昌益研究の四十数年を収束させる意味で、2011年に第二の専著『互性循環世界像の成立—安藤昌益の全思想環系—』を上梓した。決して十分とは言えないものの、昌益の全思想分野を探究し統一的に扱った最初の試みだと自負している。2012年が昌益没後250周年の節目に当たることも強く意識して、先行祝いの意味も込めて書いた。上梓した直後に東北大震災と福島原発事故が発生した事で私にとって、この年は二重に大きな節目になった。

このほか、私は2012年が「安藤昌益全集」完成後25年＝四半世紀の節目である事から、この間に刊行された昌益研究文献目録を国内編・海外編に分けて作成した。小林嬌一・斉藤尚夫両氏が趣旨に賛同して協力してくれた。昌益研究関係団体の機関誌掲載記事は自明につき除いたが、重要な文献として国内260篇、海外40篇を見出した。この作業で気付いたことの一つに、大学の研究者には近世思想や哲学での(前項で述べた狭義の)職業的昌益研究者と別に、他の学問分野にあって昌益の思想を学生たちと社会に伝えようとして昌益論を書いた教員が多数おられること、その論考の中には啓発される真摯な内容のものも相当数あったことを指摘しておきたい。

なお昌益医学の重要な一環をなす脈診論の写本「良中子神医天真」(早稲田大学所蔵本で、内藤くすり博物館本と書名が同じが内容が異なる)を安藤昌益の会と共に見出し、石渡博明・山崎庸男・八重樫新治の各氏との協同で読み下しと注釈解説付きで、昌益没後250周年の節目＝2012年に同会の刊行物に結実できた事は生涯の慶事だと感じている。もし寺尾五郎氏が生きていたら、ご自分の出身校にこのような重要な典籍が明治末期から100年もの間、静かに眠っていたことにはさぞ仰天されたことであろう。

#### 4) 今後の自課題＝自然真営道から現代自然真営道へ——次世代への架橋

こうして20歳代後半から四十数年、昌益思想と取り組んできて、自分なりに大きく脱皮できたと思える事が一つある。昌益の「自然世」思想は、日本列島に人々が住みついて1万年の長きにわたり自然と共生し平等な社会を築いた縄文文化と、弥生時代以来の稲作文化の伝統に通じる近世的所産と理解することができ、それは中国や朝鮮の歴史に比べてむしろ有意義な経過と言って良いのでは、という歴史観である。弥生時代以後の文明社会＝

階級社会の始まりが中国・朝鮮よりも遅かったというようなコンプレックスを一掃できるようになった。長期にわたって「自然世」を持続する能力が、やがて外来文化に接しても滅びること無く、逆に吸収しつつ自己を改変し今日の日本文化・日本社会を築き上げたのだから、文明社会が遅れて始まったなどと卑屈になる必要は全くない。

最後に今後の自らの課題について述べさせていただく。私は長い間、科学技術者を本職としながら昌益思想研究に取り組んできた。それはしかし、他人から見れば二元的行動であった。自己の内面でも昼と夜、週日と週末を使い分ける二元的な志向になりがちであった。退職後の今、私は両者を実質的に統一した思想的営為を創出しなければならないと感じている。具体的には、自然真営道の思想・理論を内発的に展開して、現代科学技術への批判＝現代自然真営道として提示出来なければ、と念じている。これは昌益の思想を現代視点で解釈する事とは逆の思想的営為となる。マルクス・エンゲルスの古典思想を現代的に展開するのと同様に、昌益の古典思想を現代的に展開したい——名付けて、“自然真営道から現代自然真営道へ”。

この作業の過程では、昌益思想の内在的理解、全般的理解、比較思想的観点、現代科学思想、読者への配慮といった事柄が不可欠であろう。これが出来たときに初めて、昌益の全思想を消化し近未来に活かす事ができるのである。そしてそれをもって、次世代への架橋の役割も果たせるものと思っているところである。平均寿命まで残された年数は一桁になったので、安閑としてられないこの頃である。（2014年1月）